

一般論文

受付 1997.9.17

受理 1997.11.20

青年（学生）の高齢者イメージに関する一考察

久世 淳子

日本福祉大学 情報社会科学部

A Study on the Image of the Aged

Junko Kuze

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Abstract: The image of the aged was measured by semantic differential scales. Eighty-seven university students and eighty-nine nursing students rated fifty-six pairs of adjectives and the frequency of their contact with grandparents and the aged. A factor analysis revealed three factors—evaluation, maturity, and strength. The negative image of the aged was found in the strength factor; subjects thought that the aged was weak and slow. Subjects who had more frequent contact with their grandparents in early childhood gave the aged the better evaluation. Furthermore, subjects who currently had more frequent contact with the aged thought the aged was weaker and slower. The frequent contact with the aged forms the negative image of the aged, and the frequent contact with their own grandparents in childhood forms the positive image.

Keywords: image of the aged, semantic differential scale, frequency of the contact with the aged

1. はじめに

平均寿命が長くなるにつれて、さまざまな年齢の人々が社会の中で共存することが必要となってきた。ある年齢の人々が異なる年代の人々について抱くイメージは彼らの行動に影響をあたえると同時に、行動の結果によって新たなイメージが形成されると考えられる。このように異なる年齢の人々についてのイメージやイメージ形成に影響をあたえる要因について調べることは、これからの社会において重要な課題となろう。

異なる年代の人々に対するイメージの中で、しばしばとりあげられるのは高齢者に対するイメージ、特に否定的なイメージの問題である。大学生以上の日本人の高齢者観を扱った研究では否定的な高齢者観の存在が繰り返し明らかにされていると古谷野¹⁾(1993)は

指摘している。そこで、本研究では異世代間イメージ検討の手始めとして、「おとなでもなく、こどもでもない」といわれる青年の高齢者に対するイメージとそのイメージに影響をあたえる要因について検討する。

大学生の高齢者イメージについては保坂と袖井²⁾(1986)がSD法を用いて測定し、その規定要因について検討している。大学生を対象に10項目の形容詞対を用いて高齢者のイメージを測定したところ、「あたたかい」や「優しい」といった肯定的なイメージと「弱い」や「頑固な」といった否定的なイメージが表れた。これらのイメージを規定する要因としてもっとも効果の大きかったものは、「老人と話す機会」と「老人や老人問題に対する関心」であった。「祖父母との同居経験」はそれのみでは重要な規定因とはなりえ

ず、同居している高齢者と若者がどのような接し方をしているかといった経験の内容がイメージを規定していた。

さらに、保坂と袖井³⁾(1988)は大学生を対象に50項目の形容詞対を用いて、高齢者のイメージを測定している。因子分析の結果、「有能性」、「活動・自立性」、「幸福感」、「協調性」、「温和性」、「社会的外向性」の6つの因子が抽出され、大学生は「温和性」や「有能性」に対しては肯定的な評価をするものの、「活動・自立性」に対しては否定的な評価をしていることが示されている。イメージを規定する要因としては、前回と同じように基本的属性よりも高齢者への関心や祖父母との接触など個人の経験に基づく要因の方が重要であった。「有能性」や「活動・自立性」では外部からの情報やそれに刺激された高齢者に対する積極的な態度が重要な規定因になっているのに対し、「幸福感」、「協調性」、「温和性」、「社会的外向性」ではより身近な高齢者との接触の影響が大きかった。

これら2つの研究から、「祖父母との同居経験」より「祖父母との接触経験」の方が高齢者のイメージを規定する要因としては重要であるといえる。また、内山ら⁴⁾(1990)は父母へのアンケートを通して幼児の祖父母イメージを調べ、祖父母との接触が多くなれば祖父母への好意度も増大するという傾向を見出している。さらに、小学生を対象とした遠近⁵⁾(1993)は自分の祖父母の方が一般の高齢者より肯定的なイメージであることを明らかにした。つまり、高齢者に対するイメージの規定因としての「祖父母との接触経験」と「一般の高齢者との接触経験」ではイメージに与える影響が異なっている。さらに、そのイメージの差が小学生の段階ですで見られていることから、「現在の接触経験」よりも「過去の接触経験」が高齢者のイメージに大きな影響をあたえる可能性も考えられる。そこで、本研究では現在の祖父母との接触経験だけでなく過去(小学校入学以前、小学生時代、中学生時代、中学校卒業以後)の祖父母との接触経験の影響についても調べることにする。

保坂と袖井^{2), 3)}(1986, 1988)では高齢者のイメージをプロフィールを描くことによって示しているが、そのイメージが「こども」などの他の年代に対するイメージとどのように異なるかについては検討していない。高齢者のイメージだけでなく複数の年代に対する

イメージを調べた研究としては、大学生を対象に青年、中年、老年という3つの年代のイメージを調べた白と無藤⁶⁾(1990)が挙げられる。この研究は日本と韓国の大学生を対象に形容詞がもつ属性がどのくらいあると思うかを5段階で評定し、因子分析を行ったもので、「忍耐力のある」、「興味が広い」、「不満のある」、「正直な」、「のんきな」という5つの因子を抽出している。青年は「興味が広い」というイメージで、中年は「忍耐力のある」、そして老年は「のんきな」イメージであった。異なる年代の人々との共存について考えるためには成人のみならず、乳幼児や児童についてのイメージと比較する必要がある。そこで、ここでは高齢者のイメージが他の年代とどのように異なるかということについても検討する。

2. 方法

調査対象者：北海道空知支庁にある2つの看護学校、および教育大学の学生。看護学校生は1年生89名(男子5名、女子84名、平均年齢19歳)で、教育大学生は1～4年生87名(男子54名、女子32名、性別不明1名、平均年齢19.9歳)であった。

質問紙の構成：性別や所属といった基本的属性をのぞいた質問項目は、イメージを調べるための項目と高齢者との接触を尋ねる項目に分かれている。

イメージについては、「あかちゃん」、「こども」、「おとな」、「おとしより」という4つの単語に対するイメージをSD法により測定した。高齢者イメージに関する文献に加え、パーソナリティや自己概念の測定に有効な形容語の中から56対を選び、7件法で回答を求めた。4つの単語の呈示順序はカウンターバランスされている。

高齢者との接触経験は1.祖父母の人数、2.祖父母との同居経験、3.小学校入学以前・小学生・中学生・中学校卒業以後・現在の5つの時期の祖父母との接触頻度、4.高齢者との接触頻度について尋ねた。

実施方法：心理学、および児童心理学の講義中に無記名で集団実施した。

3. 結果と考察

ここでは4つの年齢のイメージを比較するため、4つの単語に対する回答を込みにして因子分析を行った。7段階の評定を1～7点として、主因子法で因子解を

表1 因子分析の結果

| 形容語対 | 因子負荷量 | | |
|---------------|---------------|---------------|----------------|
| | 因子1 | 因子2 | 因子3 |
| 好きな-嫌いな | 0.8044 | -0.1088 | 0.0515 |
| 気持ちのよい-気持ちの悪い | 0.7760 | -0.1561 | 0.0772 |
| かわいらしい-にくらしい | 0.7737 | -0.2861 | -0.0863 |
| 楽しい-苦しい | 0.7535 | -0.2340 | 0.1948 |
| 良い-悪い | 0.7522 | 0.0250 | -0.0015 |
| 面白い-つまらない | 0.7441 | -0.2274 | 0.2082 |
| 幸福な-不幸な | 0.7189 | -0.0860 | 0.1250 |
| 暖かい-冷たい | 0.7152 | -0.0228 | -0.2494 |
| 丸い-四角い | 0.7136 | -0.2781 | -0.1954 |
| 愉快的な-不愉快的な | 0.7127 | -0.1484 | 0.2195 |
| 美しい-醜い | 0.7080 | -0.1324 | 0.0627 |
| 嬉しい-悲しい | 0.7047 | -0.1319 | 0.1450 |
| 元気な-疲れた | 0.7018 | -0.4363 | 0.2859 |
| やわらかい-かたい | 0.6979 | -0.4163 | -0.0169 |
| 陽気な-陰気な | 0.6570 | -0.2596 | 0.2779 |
| 明るい-暗い | 0.6322 | -0.4179 | 0.3103 |
| 素直な-強情な | 0.6288 | -0.2273 | 0.0742 |
| きれいな-きたない | 0.5972 | 0.1695 | 0.0607 |
| 優しい-厳しい | 0.5708 | 0.2041 | -0.2141 |
| 豊かな-貧しい | 0.5535 | 0.1855 | 0.2368 |
| やさしい-こわい | 0.5338 | 0.2257 | -0.2343 |
| 清潔な-不潔な | 0.4184 | 0.2744 | 0.1020 |
| 落ち着いた-落ち着きのない | -0.3304 | 0.8049 | -0.1231 |
| 責任感のある-無責任な | -0.1400 | 0.7671 | 0.1586 |
| きちんとした-だらしない | -0.0403 | 0.7510 | 0.0171 |
| 思いやりのある-わがままな | 0.0035 | 0.7239 | -0.0222 |
| 慎重な-軽率な | -0.1798 | 0.7057 | -0.0828 |
| 安定した-不安定な | -0.2705 | 0.6919 | 0.1822 |
| 理性的な-感情的な | -0.3812 | 0.6398 | 0.0519 |
| 静かな-うるさい | -0.1414 | 0.6166 | -0.3247 |
| 親切的な-不親切的な | 0.1769 | 0.6079 | -0.1402 |
| まじめな-ふまじめな | 0.0410 | 0.5892 | -0.1536 |
| 頼もしい-頼りない | -0.1041 | 0.5756 | 0.4835 |
| 深い-浅い | -0.0831 | 0.5696 | 0.0179 |
| 大きい-小さい | -0.4478 | 0.5688 | 0.3504 |
| 重い-軽い | -0.4247 | 0.5069 | 0.2502 |
| 複雑な-単純な | -0.1455 | 0.4534 | 0.1753 |
| 広い-狭い | 0.1706 | 0.4295 | 0.2946 |
| すばやい-のろい | -0.0038 | -0.0875 | 0.7917 |
| たくましい-弱々しい | -0.0957 | 0.2302 | 0.7676 |
| 速い-遅い | 0.0057 | -0.0646 | 0.7234 |
| 強い-弱い | -0.1520 | 0.2811 | 0.6711 |
| 外向的な-内向的な | 0.2202 | 0.0710 | 0.6598 |
| 鋭い-鈍い | 0.0652 | 0.0891 | 0.6413 |
| 強気な-弱気な | 0.0583 | 0.0954 | 0.6362 |
| 積極的な-消極的な | 0.3187 | -0.1433 | 0.6267 |
| はげしい-おだやかな | -0.0736 | -0.3375 | 0.6124 |
| 意欲的な-無気力な | 0.4400 | -0.1338 | 0.5562 |
| 活発な-不活発な | 0.5042 | -0.3444 | 0.5464 |
| 派手な-地味な | 0.3388 | -0.3363 | 0.5384 |
| 勇敢な-臆病な | 0.1156 | 0.3009 | 0.5358 |
| のんびりした-こせこせした | 0.3994 | 0.1798 | -0.5213 |
| 社交的な-非社交的な | 0.1021 | 0.2893 | 0.5001 |
| 敏感な-鈍感な | 0.3735 | -0.1546 | 0.4438 |
| 男性的な-女性的な | -0.2708 | 0.1858 | 0.4265 |
| おしゃべりな-無口な | 0.2623 | -0.1961 | 0.4018 |
| 因子負荷量2乗和 | 12.3394 | 8.5427 | 7.9438 |
| 寄与率(%) | 22.0346 | 15.2548 | 14.1853 |
| 累積寄与率(%) | 22.0346 | 37.2894 | 51.4747 |

求めた。固有値の減少率を考慮し、3因子解を選択した(表1)。なお、表1の各形容語対の得点は右の語が7点になるように配点してある。

第1因子は「好きな-嫌いな」、「気持ちのよい-気持ちの悪い」、「かわいらしい-にくらしい」、「良い-悪い」といった形容語対を含む「評価」の因子であった。第2因子は「落ち着いた-落ち着きのない」、「責任感のある-無責任な」、「きちんとした-だらしない」、「思いやりのある-わがままな」といった「円熟性」の因子であった。第3因子は「すばやい-のろい」、「たくましい-弱々しい」、「速い-遅い」、「強い-弱い」といった「強度」の因子であった。杉下⁷⁾(1982)によればOsgoodらは3つの主要な次元として「評価(evaluation: E)」、「力量(potency: P)」、「活動性(activity: A)」を抽出している。今回の結果では、Eの次元は第1因子として抽出されているが、PとAは第3因子に混在している。

これら3因子の因子得点を算出し、世代ごとに平均点を求めたものが表2である。4つの世代のイメージに差があるかどうか検討するために分散分析を行った。すべての因子で、1%水準で差が見られた(評価: $F(3, 661)=148.9$, $p<.001$; 円熟性: $F(3, 661)=218.6$, $p<.001$; 強度: $F(3, 661)=266.9$, $p<.001$) ため、多重比較を行った。「評価」の因子では4つの単語間すべてに差が見られ、「あかちゃん」に対する評価がもっとも高く(因子得点が低く)、「こども」、「おとしより」、「おとな」の順に評価が低くなっている。「円熟性」の因子では「あかちゃん」と「こども」、「おとな」と「おとしより」の間には差が見られず、「あかちゃん」や「こども」に比べ「おとな」や「おとしより」の方が円熟したイメージであることがわかる。「強度」の因子では「こども」と「おとな」の間に差は見られず、「おとな」と「こども」がもっとも強く(因子得点が低く)、「あかちゃん」、「おとしより」の順となっている。高齢者がもっとも否定的に評定されるのは「強度」

表2 各年代の因子得点

| 因子名 | あかちゃん | こども | おとな | おとしより |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 評価 | -0.807 | -0.290 | 0.871 | 0.237 |
| 円熟性 | 0.612 | 0.748 | -0.647 | -0.725 |
| 強度 | 0.435 | -0.719 | -0.672 | 0.954 |

の因子において、「おとしより」という言葉は人の一生の中で一番のろくて弱々しいイメージを持っていることがわかる。

調査対象者の属性については、保坂と袖井（1986, 1988）と同様に高齢者のイメージを規定する要因とはなりえなかった。そこで、高齢者との接触経験がイメージにどのような影響をあたえているか検討する（表3）。高齢者の評価の因子得点には「小学校入学以前の祖父母との接触頻度」($t(107)=2.595, p=.01$)と「小学生時代の祖父母との接触頻度」($t(110)=2.11, p<.05$)が影響をあたえていた。いずれの場合も、祖父母と毎日接していた者の方が週1回以下の接触頻度の者より高齢者を高く評価していた。祖父母との接触の時期についていえば、現在ではなく小学校入学以前、あるいは小学生時代の祖父母との接触が高齢者の評価に影響をあたえることがわかった。

ところで、高齢者の強さの因子得点には「現在の高齢者との接触頻度」が影響を与えている ($t(134)=2.09, p<.05$)。毎日高齢者と接している者の方が週1回以下の接触頻度の者より弱いイメージを高齢者に対してもっているが、これは壮年期では老人と同居していない者の方が同居している者よりも老いの特性を肯定的に受け止めているという結果（木村⁸⁾, 1990）と類似している。高齢者のイメージは現在の頻繁な高齢者との接触によってのろくて弱々しいものになる。さらに木村の結果を考慮すれば、同居する高齢者が自分の父母の場合と祖父母の場合、あるいは一般の高齢者の場合で高齢者イメージにあたえる影響が異なる可能性も否定できない。この点については、さらに検討する必要があろう。

表3 高齢者のイメージに影響を与える要因

| 因子名 | 要因 | 因子得点 |
|-----|--------------|----------|
| 評価 | 小学校入学以前の接触頻度 | 週1以下>毎日* |
| 評価 | 小学校の接触頻度 | 週1以下>毎日* |
| 強度 | 現在の高齢者との接触頻度 | 週1以下<毎日* |

(* : $p<.05$)

文献

- 1) 古谷野亘：老いに対する態度。柴田・芳賀・長田・古谷野(編)：老年学入門，pp. 177-184，川島書店，東京（1993）
- 2) 保坂久美子，袖井孝子：大学生の老人観。老年社会科学，8，pp. 103-116（1986）
- 3) 保坂久美子，袖井孝子：大学生の老人イメージ—SD法による分析—。社会老年学，27，pp. 22-33（1988）
- 4) 内山道明，吉村智恵子，三輪弘道，望月久乃，鈴木正弥，黒川郁代，久世淳子：高齢者の心理特性と社会適応。厚生省厚生科学研究費補助金シルバーサイエンス研究平成元年度研究報告，pp. 227-228（1990）
- 5) 遠近三和子：小学生の高齢者に対するイメージ—自分の祖父母と“ふつう”のお年寄りとの比較—。日本発達心理学会第4回大会発表論文集，p. 218（1993）
- 6) 白銀珠，無藤隆：大学生の成人イメージ。日本発達心理学会第1回大会発表論文集，p. 164（1990）
- 7) 杉下守男：セマンティック・ディファレンシャル法。塩見・金光・足立(編)：心理検査・測定ガイドブック，pp. 81-86（1982）
- 8) 木村留美子：SD法による“老い”のイメージについて—壮・老年期を中心に—。日本心理学会第54回大会発表論文集，p. 29（1990）